特集「インタラクションの理解および基盤・応用技術」の編集にあたって

宮下 芳明[1,a)]

ヒューマンコンピュータインタラクション研究会，グループウェアとネットワークサービス研究会，ユビキタスコンピューティングシステム研究会，エンタテインメントコンピューティング研究会の4研究会の主催により，毎年「インタラクション」シンポジウムが開催されている．本シンポジウムは厳しい査読を経た一般講演と百数十件のインタラクティブ発表から成り立っており，いずれも好評でこの数年は600名を超える参加者を集めるまでに発展している．インタラクション2012では，「未来につなぐインタラクション」をテーマに，インタラクティブ発表の論文ページ数を2〜4ページから原則6ページにするなどの改革を行い，18件の一般講演発表，154件のインタラクティブ発表（一般講演者のデモ含む）が発表され，約700名の参加者を集めた．

インタラクションに関連する研究は進歩が早いことから，タイムリーな論文化の機会を提供することが非常に重要である．そこでインタラクション2012の開催時期にあわせてインタラクションの特集号を組み，インタラクション2012における発表論文および関連研究を広く集め，速やかに公表する機会とした．

ゲストエディタにはインタラクション2012のプログラム委員長をつとめた筆者が就任し，編集委員にはインタラクション2012の主要プログラム委員ほかインタラクション研究に関わりの深い者が就任し，投稿された43件のうちから特に優れた25件の論文を採録した．なお，インタラクション2012プログラム委員会において特に優れた論文として評価された10件（投稿数の上位5.2%）の発表は推薦論文として選んだ．内訳は，一般講演発表から8件（投稿数の上位18.6%），そしてインタラクティブ発表2件（投稿数の上位1.3%）である．これらは著者に投稿を促し，通常の査読審査を経て，当特集号に採録することができた．

推薦論文でない一般の投稿の採択率は去年よりも高くなってこそいるが，インタラクション2012にて一般講演として採択された論文が多く含まれているだけでなく，インタラクティブ発表の論文ページ数を2〜4ページから原則6ページに引き上げていること，インタラクション2012終了から本特集号論文締め切りまで3カ月余りの期間が確保されており，シンポジウムでの議論をふまえた執筆も十分に行える等から，むしろ論文の質は高くなっていると考えている．

本特集号の編集にあたって，あらゆる面からご尽力いただいた寺田努幹事，鈴木健嗣幹事をはじめとする特集号編集委員会委員および査読者各位に深く感謝申し上げる．

なお，筆者はインタラクション2012でプログラムを構成するにあたって，セッションタイトルを「つけない」という改革を行っている．この分野は領域横断的な研究が多く，一面的にカテゴリを決めにくいどころか，むしろカテゴリを決めることが著者のデメリットにすらなる，と判断したからである．本特集号においても，領域横断的な研究を一面的に分類するとその価値を下げてしまいかねず，また，これまでの特集号と比較されて特定のカテゴリが増えたり消えたりしたような印象を与えてしまいかねないと考えた．こうした経緯から，目次にカテゴリ分けを設けないという改革を行ったことを，ここに付記しておく．

「インタラクションの理解および基盤・応用技術」特集号編集委員会

- 編集長
  宮下芳明（明治大学）
- 幹事
  寺田　努（神戸大学），鈴木健嗣（筑波大学）
- 編集委員
  秋田純一（金沢大学），綾塚祐二（トヨタIT開発センター），井上智雄（筑波大学），江渡浩一郎（産業技術総合研究所），岡本昌之（東芝），小野哲雄（北海道大学），加藤直樹（東京学芸大学），河野恭之（関西学院大学），北村喜文（東北大学），後藤真孝（産業技術総合研究所），佐藤　誠（東芝），志築文太郎（筑波大学），苗村　健（東京大学），中西英之（大阪大学），福本雅朗（NTTドコモ），藤波香織（東京農工大学），細部博史（情報学研究所），三浦元喜（九州工業大学），水口　充（京都産業大学），迎山和司（はこだて未来大学）

1　明治大学
Meiji University, Kawasaki, Kanagawa 214–8571, Japan
a)　homei@homei.com

© 2013 Information Processing Society of Japan